比・地滑り

日本NGO活動開始

被災地、心のケア課題

【セントバーナード（レイテ島）＝木村文】大規模な地滑りの被害を受けたフィリピン中部レイテ島セントバーナードで21日、日本の国際NGO「AMDA」（本部・岡山県）の日本人医師らが医療支援の活動を始めた。同日午後までに発見された遺体は107、行方不明者は約1千人と見られている。被災から5日、学校などに避難した約2千人の住民は、今も行方不明の家族の安否を気遣い続け、医師らによる心のケアが課題になっている。

＝1面参照

この日までに被災地入りしたのは、医師の藪谷亨さん(36)＝静岡県浜松市＝と看護師の竹内美妃さん(33)＝北海道浜中町＝ら5人の日本人スタッフ。22日にはAMDAインドネシア支部のインドネシア人医師3人も合流する。フィリピンの法律で直接の治療はできないが、避難民の健康診断や、現地の医師らに対する医療指導を行う。

藪谷さんらは、地滑りで集落の9割が土砂に埋もれたギンサウゴン地区の住民が避難するセントバーナード中心部の高校を訪れた。約260家族、650人余が身を寄せている。

「この避難所の45％の世帯で子供が行方不明になっている」。ギンサウゴン地区の小学校では約250人の子供と教員が校舎とともに土砂の下敷きになったままだ。避難所で活動する医師アーネスト・カホイさん(55)は「深い悲しみのためか、眠れない、食事ができないという人の相談が目立つ」と話す。

避難所で被災者は一部屋に50から60人がすし詰めで過ごす。呼吸器系の病気の感染や、ストレスによる病気も多く見られるという。